

18世紀後期から19世紀における英国の不純物混和文化史序説（4）

An Introduction to the Cultural History of Adulteration in England between the Late Eighteenth and Nineteenth Centuries, IV

大 嶋 浩*
OSHIMA Hiroshi

前号の続きである。主に19世紀後半を扱っている。分析衛生委員会を立ち上げ、本格的なキャンペーンを展開していった医学専門雑誌『ランセット』とそのキャンペーンを支持した『パンチ』を主にとりあげ、不純物混和が大社会問題として認識されるようになっていったこと、及び、その結果、一連の法律が制定されて不純物混和の取り締まりが漸次強化され、ヴィクトリア時代の終わりまでには大幅な改善が図られていったこと、を明らかにした。

キーワード：不純物混和，文化史，英国，18世紀後期，19世紀

Key words : adulteration, cultural history, England, the late eighteenth century, the nineteenth century

4. 1820年から1850年までの時期

(4) エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』

「ロンドンの諸改良」が発表された1845年には、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』(Frederick Engels, *The Condition of the Working Class in England*, 1845) も発表されている。エンゲルスは1842年11月から1844年8月まで英国のマンチェスターに滞在した。彼の父が出資していた「エルメン・アンド・エンゲルス」紡績工場で、商人としての最終的な修行を積むためであった。この本は、その間に彼自身が見聞したり研究したりしたことにもとづいて、1844年11月から翌年の3月にいたる時期に執筆された(中林 266)。当時の英国の産業都市の貧困の状態を考察し、報告した貴重な本となっている。以下、不純物混和に焦点をあてて、やや詳細にエンゲルスの報告に耳を傾けてみよう。

エンゲルスによれば、英国の大都市ではなんでも一番いい品を手に入れることが出来るが、それには高いお金がかかる。わずかばかりの家計でやりくりしていかなければならない労働者が手に入れるものといえば、「有産階級の口にはとうてい合わないような食物」である(101)。「労働者の買うジャガイモはたいてい粗末であり、野菜はしおれていて、チーズは古くて劣等な品質であり、ベーコンは古くて酸っぱい味がし、肉は脂肪が少なく、古くて、硬くて、老いばれの動物や、しばしば病気がくたばって死んだ動物の肉であって——すでになかば腐っていることもしばしばある」(101)。これらの食物の中で、特にエンゲルスが注目しているのが「腐った状態」の肉類である：

1844年の1月6日（もし私のひどい記憶ちがいでないとするれば）に、マンチェスターでリート裁判所(court leet)¹が開かれ、そのとき11人の肉の販売者が、腐った肉を売ったかどで罰せられた。これらの肉屋は、それぞれ、まる一匹の牛か豚、あるいは数匹の羊か50ないし60ポンドの肉をもっていたが、これらの肉はすべて腐った状態にあったので没収されてしまった。そのうちのある肉屋の場合は、詰め物をした64羽のクリスマス用鷺鳥が差し押さえられたが、この鷺鳥はリヴァプールでは売れなかったのでマンチェスターに送られ、ここで腐敗して悪臭のするまま市場で売り出されたのである。この一件は、氏名や罰金額とともに全部、当時の『マンチェスター・ガーディアン』紙で報道された。(101)

さらに続けて、エンゲルスは7月1日から8月14日までの6週間に、同紙が報道した、3件のこの種の事件を取りあげている。8月3日号のヘイウッドでの事件(死んで腐っているとわかった豚一匹を、ある肉屋が細かに切って売り出し、没収された事件)、7月31日号のウィガンでの事件(二人の肉屋が、腐った肉を売りに出したかどで2ポンドと4ポンドの罰金刑を受けた事件、しかもその二人は再犯であった)、8月10日号のボールトンでの事件(26個の腐ったハムが差し押さえられ、役人によって焼き捨てられ、その小売商人は20シリングの罰金刑を受けた事件)である。エンゲルスによれば、6週間に3件というのは、年間の平均数を割り出す参考にはならないという。「毎週2回発行される『ガーディアン』紙が、どの号もみな、マンチェスターあるいはその近隣

で発生した同様の事件を伝えているときがしばしばある」からである(101-02)。

これらの事件は、いずれも、我々がだまかに区分した2種類の不純物混和のうち、いわゆる(1)型の放置タイプの例である。製造・販売・供給者の観点から言えば、それらの例のうち、「死んで腐っている」とわかっているながら販売しようとしたヘイウッド事件は、故意に行ったものとして、明らかに、いわゆる(a)タイプ(粗悪品を、ごまかしに気づかぬ客につかませるためのもの)に属するものと言えるが、他の例は故意か不注意のいずれで行われたのか判然としない。おそらくその大半は故意に行われた(a)タイプであろうと推察されるが、いわゆる(c)タイプ(原材料を選んだり、その品物を製造したり取り扱ったりするときに不注意であって、そのために品物が汚染されたり、劣化して粗悪品となり、本来の用途に耐えなくなってしまうもの)に属するものが含まれていた可能性も否定できない。いずれにせよ、肉に関する限り、放置タイプの不純物混和の蔓延ぶりには目を見張るものがある。

もう一つの不純物混和、いわゆる(II)型の混合・添加タイプの蔓延ぶりも、同様にはなはだしかった。エンゲルスは、「商人と製造業者は、極悪非道なやり方で、消費者の健康など全く無視して、あらゆる種類の食料品に混ぜ物をする」(102)と指摘し、一証左として、『リヴァプール・マーキュリ』紙の記事を引用している。かなり長い引用であるが、地方の大都市の不純物混和の手口の一端を垣間見ることが出来る資料として、以下にそっくり引用しておこう：

「塩入バターが生バターとして売られているが、それは塩入バターのかたまりを生バターの包装紙で包んだり、あるいは味見用に生バターを1ポンドだけ塩入バターのうえにのせておき、こうした味見の吟味をさせたうえで、塩入バターを何ポンドも売ったり、あるいは塩を洗い落してから、これを生バターとして売ったりするのである。砂糖に、米粉やその他の安い材料が混ぜられ、それがそのまま定価で売られている。石鹼工場の廃物が、同じように他の物質と混ぜられて、砂糖として売られている。挽いたコーヒーの中にはチコリや、その他の安い粉が混ぜられるが、いやそればかりか、挽いていないコーヒーの中にさえ混ぜられ、そのときには、その混ぜ物がコーヒー豆の形に作られるのである。ココアは、目の細かな赤土としょっちゅう混ぜられるが、この赤土は、油脂(fat)で処理されていて、一層本物のココアと間違われやすくされている。茶はリンボクの葉や、その他の屑とまぜられるか、あるいは出廻らしの茶の葉がかわかされ、熱い銅板のうえで炒ら

れ、こうしてふたたび色がつけられて、新鮮な茶として売られるのである。胡椒には挽いて粉末にした堅果の殻が混ぜられる。ポートワインは直接製造される(アルコールや色素等を使って)が、イングランドだけで、ポルトガルで生産されているよりも多くのポートワインが消費されていることは周知のことである。そして煙草は、この商品のありとあらゆる型に応じて、あらゆる種類の胸のむかつくような材料と混ぜられる。」(102-03)

すでに18世紀のロンドンで蔓延していた茶やポートワイン等の不純物混和の例がここにも顔を出している。しかも、これらの例は、いずれも、故意に行われた(a)タイプのものである。スモレットが非難していた大都会のバースやロンドンの悪弊は、地方の大都市化に伴い、北部の産業都市にも波及し、イングランド全体を蝕んでいっているといつてよいであろう。

エンゲルスは、その悪弊の背後に潜む、「中産階級[商人や製造業者]の金銭欲」(102)を強く非難しているが、この金銭欲は、まさにアークムが「利益を求める熱烈な飽くなき渴望」(Accum 31)と呼んで非難していたロンドン商人たちの節義なき食欲と同一のものである。

エンゲルスの報告では、今やあらゆる品物にこのような「詐欺(fraud)」(103)が行われているが、金持ちはこれらの詐欺に欺かれることが少ない。彼らは大きな商店の高い価格を支払うことができるからである。大きな商店は店の信用を大事にしなければならず、もし混ぜ物をされた粗悪品を扱えば信用を落として破産しかねない。また、金持ちは美食に慣れているので自分の洗練された舌でたやすくそれを見破ってしまう。しかし、貧乏人である労働者たちはそうはいかない。貧しい食事しか知らない彼らの舌では十分に品質を見分けることは難しいし、できもしない。また、なけなしの金で小商人からできるだけ安い品を買わざるを得ない身であってみれば、選択の余地はほとんどないし、売り手の小商人の方でも他の小商人とも競争等があるために、できるだけ安い価格の混ぜ物をされた品を意図的にないしはそれと知らずに仕入れなければならない。しかも大都市の中のたった一つの通りで商売を営むこれらの小商人にとって信用はなんの足しにもならない。ある通りで詐欺が露見して信用がなくなったらさっさと店とたたみ、誰も彼のことを知らない別の通りで、また詐欺を続けていくのである(103-04)。

結局、労働者の置かれている状態を顧みない「原子に解体した社会」(106)においては、全てのしわ寄せは貧しい労働者が被ることになる。不純物混和の被害を一番受けるのはそうした貧しい者たちである。彼らを保護すべき国の法律の不備をエンゲルスは、以下のように指摘

している：「不純物混和が消費税の横領を含んでいる場合でなければ、不純物混和に対してほとんど法的な刑罰が科されていない」（104）。『ハンフリー・クリンカー』の中で、スモレットが、ブランブルの口を通して、不純物混和を阻止するために「ロンドンの愛国者たち」に公的な法律による取り締まりの強化を訴えていたことが思い起こされる。エンゲルスもたんに中産階級の貪欲さを非難するだけでなく、法の取り締まりの強化という、国や政府の積極的な介入・保護を支持し、その必要性を強く認識していたといつてよいであろう。

しかし1840年代までは、こうした福祉国家的な政策を求める声は、大きな流れを作り出すまでには至らなかった。ナポレオン戦争終結時（1815年）までに開明的な議員はどの党派であれ、自由放任の原理の信奉者となっていたこと、及び、イギリス法における伝統的な「買い主を用心せしめよ」（caveat emptor）の原則（『イギリス法の格言』263；Altick, *Victorian People* 173）が、強い枷となっていたのである。しかし、50年代に入るとようやく風向きが本格的に変化し始めることになる。

5. 1850年代以降

50年代早々、まず急進的な医学週刊誌『ランセット』が、顕微鏡使用者のハッスルを擁して、積極的なキャンペーンに乗り出していった。大衆週刊誌『パンチ』等もそのキャンペーンに加担し、かくして不純物混和の問題が国民の健康と生活を脅かす、緊急の大社会問題と認識されるようになっていった。

(1) アーサー・ヒル・ハッサルと「ランセット分析衛生委員会」

内科医で顕微鏡使用者であるアーサー・ヒル・ハッサル（Arthur Hill Hassall, 1817-94；図1）は、挽いたコーヒーを顕微鏡で見るという検査法を思いついた。これまではコーヒーとチコリなどの他の混ぜ物との区別するのに有効な化学的な方法をなかなか見いだせなかったのだが、顕微鏡を使えば、小片であっても組織上の違いが即座に示されうる。ハッサルが種々の店で購入したコーヒーのサンプルのほとんど全てが、様々なやり方で広範に混ぜ物をされていた。ほとんどチコリからできているコーヒーもあったが、多くの場合、かなりの量の、炒った小麦やエンドウ豆等が検出された。ハッサルの検査は論文にまとめられ、1850年8月2日にロンドンのボタニカル・ソサエティで「コーヒーの不純物混和について」と題して発表された。その論文の中でハッサルは「顕微鏡を用いて問題の混ぜ物を検出することほど、簡単で確かな方法はない」明言している（Gray 99）。²

1823年に創刊された『ランセット』の創設者で編集者でもあったトマス・ワクリー（Thomas Wakley, 1795-



図1.「アーサー・ヒル・ハッサル」。背後に飾られているのは1865年5月に公衆衛生への貢献を表彰して授与された銀製の小像（科学の槍で詐欺〔ヒキガエル〕を打ち負かしている姿が表されている）。左手にはロンドンの有名な顕微鏡メーカー、ロス社の顕微鏡と彼の著書。（Steib, Plate VIII; Gray, Plate “Arthur Hill Hassall”）

1862）は、匿名の冊子『暴露された死の不純物混和とまわりの遅い毒による中毒、あるいは鍋と瓶の中の病気と死』（1830）の書評をしたこともあり、かねてより不純物混和の問題に関心を寄せていた（Rowlinson 65）。ワクリーは、ハッサルと相談し、食品の品質検査を行ってその結果を『ランセット』に「ランセット衛生分析委員会報告」として公表することを計画した（Gray 100）。その仕事に対してワクリーがハッサルに給料を支払った。ハッサルはその仕事のために、ヘンリー・ミラー（Henry Miller）という画家を助手として雇い、サンプルの入手や顕微鏡検査の図版を描く手伝いをしてもらった。また、一部の分析は当時ロンドン病院で化学・毒物学の教授をしていたヘンリー・レサビー（Henry Letheby, 1816-76）に委ねた（Charnley 130）。³

「警戒は警備なり（転ばぬ先の杖）」（Forewarned, forearmed）をモットーに、不純物混和に関する一連の暴露記事が、ランセット分析衛生委員会報告として、1851年1月4日号から1854年12月23日号まで、毎週ないし1週間おきに『ランセット』に公表され、医学に関心のある読者の興味と関心をかきたてていった。分析対象も広範に及び、ロンドンで販売されている食品、飲み物、香辛料と薬剤の約30品目に関して、およそ2400サンプルの分析が行われ、それらのサンプルの不純物混和のレベルを詳述すると共に、その全てのサンプルの購入先業者の名前と住所ももれなく公表するという徹底したものだった（Rowlinson 65；Charnley 129；Gray 101-03）。⁴ しかも、この委員会の調査は、顕微鏡を広範に使用した最初の調査であった。重要な問題点は板目木版の顕微鏡図版入りで解説され、これまでの食品検査のなかで最も厳格で進

んだものとして、きわめて信頼性の高いものであった。(Burnett 216; Charnley 129) それ故、供給されている食品等の憂うべき状況を正確に伝えているものとして広く受け入れられていったのである。

最終的に、これらの記事は集められて一冊の本の形にまとめられ、『食品とその不純物混入』(*Food and Its Adulteration*, 1855)として159枚の図版入りで出版された(Gray 163)。さらにその後、この本の増補版が『検出された食品と薬物の不純物混和』(*Adulterations Detected in Food and Medicine*)と題して、225枚の図版入りで1857年と1861年(第2版)に出版されている(Gray 164, 165)。版を重ねていることから、この委員会の調査報告はかなりの人々の関心を引きつけたことが窺えるが、のみならず、この調査報告は大衆化された形で日刊新聞や定期刊行物に再び印刷されて流布し、広く国民に知らされていったのであった(Burnett 218, 223)。⁵ こうした興味と関心の高まりを背景として、不純物混和は当時の科学講演でも頻繁にとりあげられるトピックとなっていた。例えば、ポリテクニクの化学教授で、1848年以降はその主要講師も務めたJ. H. ペパー(John Henry Pepper, 1821-1900)は1852年6月にバートン産のビールを使って発酵について講演し、バートン産のビールは純正の商品で「麦芽とホップと湧き水だけから作られている」という結論を出して聴衆を安心させたのであった(Altick, *Shows* 386; “Royal Polytechnic Institution”)。

それでは、調査報告の一部を見てみよう。例えば、一番最初の報告はコーヒーであったが、コーヒーの34個のサンプルのうち純正だったのはわずか3個にすぎなかった。31個のサンプルにチコリが混入され、炒った穀類が12個のサンプルに、インゲンとジャガイモの粉がそれぞれ一つずつのサンプルに混入されているのが分かったのである。同報告には、「コーヒーを飲む人たちへの手引き」として、「挽いたコーヒーを決して買うべきではなく、炒った豆を手に入れるべきである」ということ、また、「缶に入ったコーヒーを決して買うべきではない、というのも間違いなくそのコーヒーは他のコーヒーよりも一層不純物混和されたものであるだろうから」等々のアドヴァイスも掲載されている(“Coffee and Adulterations” 24)。⁶ また、36の砂糖のサンプルのうち35個にはコナダニ(acari)がうようよしており、流行していた「食料商痛痒疹」(Grocer's Itch)の原因が解明された(図2; Gray 102)。34個のチコリのサンプルのうち、14個に穀類、インゲン、どんぐりが混入されていた。49個のパンのサンプルにはひとつのこらず明礬が含有されており、55個のココアのサンプルのうち純正なものは8個しかなかった。26個のミルクのサンプルのうち、11個に水が10%から50%まで様々に加えられていた。唐辛

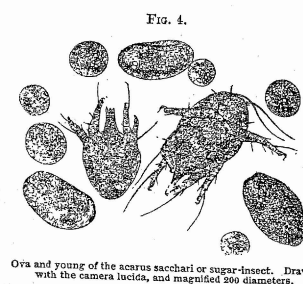


図2.「コナダニの卵と幼虫」(顕微鏡分析の図;『ランセツ』第57巻1428号77頁[1851年1月11日号])

子粉の28個のサンプルのうち、まがいものでなかったのはわずか4個だけで、13個には鉛丹が、1個には硫化水銀が含有されていた。砂糖菓子100個のサンプルのうち、59個はクロム酸銅、12個は鉛丹、11個は雌黄(黄色の顔料)、11個はプルシアンブルーとアントワープブルー、6個は硫化銀、15個は人工の群青、10個はプランズウィックグリーン、9個は亜ヒ酸銅で着色されていた(Burnett 217; “Milk and Its Adulterations” 324)。

『ランセツ』のキャンペーンは、功を奏して、政府による食料品の不純物混和に関する特別調査委員会の設置(1855-56年)を促し、1860年には「不純食品法」が制定されることになる。当時、大英博物館の図書室で『資本論』(1867)を執筆中であったマルクスも、その著書(第3篇第4章と第8章)の中で、特に「明礬、石鹼、粗製炭酸カリ、石灰、ダービシャー石粉、その他」の混入した、「信じ難いパンの不純製造」に注目し、この下院の特別調査委員会と1860年の法律、さらにはハッサルの著書『検出された食品と薬物の不純物混和』(第2版)に言及している(Marx 193-94n4)。そして「自由商業とは本質的には不純物混和された品物、あるいはイギリス人が巧妙に言う『混ぜ物をしてごまかした』品物の取引を意味する」として、マルクスは『自由商業』の神聖さを皮肉をきかせて厳しく非難している(Marx 274-75)。

『ランセツ』のキャンペーンでは、専らロンドンの飲食料品等がその調査対象であったが、その後、ハッサルは調査を地方にまで広げ、不純物混和がロンドン以外の都市でも広く行われていることを証明し、1876年には『食品：その不純物混和と検出方法』を206枚の図版入りで発表している(Rowlinson 65; Gray 168)。一方、『ランセツ』は、ワクリーとその息子の手により、新たな分析衛生委員会の報告を少なくとも1902年まで断続的に発表し続け、同誌は不純物混和問題を世間に公表し続ける重要な機能を担い続けていった(Charnley 129; *Lancet* 155.3997[1902]:94-100)。

(2) 『パンチ』

『ランセツ』が医学に関心を持つ専門的な読者を対象に不純物混和のキャンペーンを張っていったとするな

らば、一般大衆を読者としてそのキャンペーンに加担していったのが週刊諷刺漫画雑誌『パンチ』であった。

『パンチ』の創刊は1841年7月17日である。すでに40年代にもパンチは散発的に不純物混和の問題を取りあげていたが、⁷ 1851年になると、『ランセット』のキャンペーンと歩調を合わせるかのように、「商人たちに対するパンチの説教」と題する一連の記事（5週連続の記事）を発表し、商業界に出没する「小鬼たち(imps)」を糾弾していった。その連載記事のいわば「序文」にあたる初回の記事（1月4日号）では、パン屋、食料雑貨商、牛乳屋、菓子屋、居酒屋の小鬼が以下のように諷刺されている：

あらゆる商売の小鬼がそこにいた。パン屋の小鬼は明礬を挽いてパンを作り、生命の糧を売る。こいつの売る生命の糧は武器を携え、信頼して生命を預けた者のはらわたを攻撃する。

食糧雑貨商の小鬼は煉瓦くずでチョコレート濃厚にし、朝のすきま風とともに納骨堂の素材を運んで来る。

牛乳屋の小鬼はチョークを顧客に振りかざし、胃の壁にいたずら書きをする。

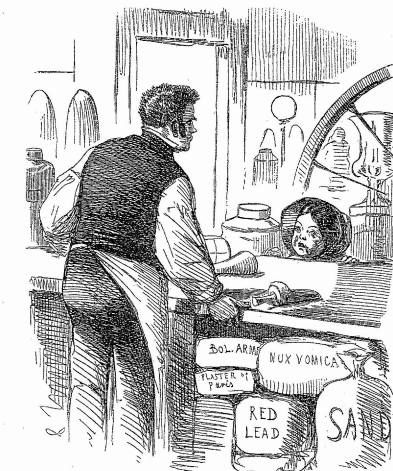
菓子屋の小鬼は十二夜のケーキをエメラルドグリーン（銅を用い、亜ヒ酸塩で顕色させてできる美しい変色）に染め、そして——とりわけ祝祭日には——ヘロデ王をまねて無垢な子供の大虐殺ごっこをする。

居酒屋の小鬼が出すビールの泡は緑礬であり、そのエールは硫酸塩でぴりっと辛口に仕上げられ、その小鬼が用いる「楽園の穀物（グレインズ・オブ・パラダイス）」⁸は蛇[悪魔]の贈り物である。

もうこれで十分であろう。いかにも——あらゆる商売の小鬼がそこにいた。そしてどの小鬼も、一人ずつ、過去の所業の英知と利益について演説したのである。（“Punch’s Sermons to Tradesmen”）

ここに出てきた「パン屋」と「菓子屋」と「食料雑貨商」が、以後、連載の2回目（1月11日号）、3回目（1月18日号）、4回目（2月1日号）に、それぞれ説教の対象として取りあげられていき、連載の最後を飾る5回目（2月15日号）は「石炭商人」への説教となっている。不純物混和とは別種の商売上の問題が話題となっている。⁹

『パンチ』は、また、2月15日号に「『ランセット』警備隊」（“The Lancet Detective Force”）と題する記事を載せ、「不正な不純物混和」を暴く分析衛生委員会を「新しい部類の警察隊であり、科学的刑事警察と称しうるもの」と称え、その委員会を組織して大衆に「多大なる恩恵」を与えた『ランセット』に対して大いなる支持



THE USE OF ADULTERATION.
Little Girl: "IF YOU PLEASE, SIR, MOTHER SAYS, WILL YOU LET HER HAVE A QUARTER OF A POUND OF YOUR BEST TEA TO KILL HER RATS WIFE, AND A OUNCE OF CHOCOLATE AS WOULD GET RID OF THE BLACK BRAGGERS!"

図3.「不純物混和の効用」（『パンチ』第29巻45頁〔1855年8月4日号〕）

を表明している。以後も『パンチ』は断続的に繰り返し不純物混和問題を取りあげていくことになる。

特別調査委員会の設置から法律が制定されるまでの時期に発表された『パンチ』の代表的な諷刺漫画として、「不純物混和の効用」（“The Use of Adulteration”）と「偉大なる菱形ドロップ製造人」（“The Great Lozenge-Maker”）をとりあげ、『パンチ』による不純物混和批判の一端を見ていきたいと思う。これらの諷刺漫画はいずれもジョン・リーチ（John Leech, 1817-64）の手になるものである。

(i) 「不純物混和の効用」

1855年8月4日号に掲載されたものである（図3）。キャプションには、女の子がお使いとして登場し、その子は無邪気にお母さんに言いつけられたことを伝えて、不純物混和の品物を購入しようとしている：「ネズミを殺すために1番いいお茶を4分の1ポンド、それにゴキブリ退治用にチョコレートを1オンス、お願いしますって、お母さんが言ってます。」

女の子が買うのは「一番いいお茶4分の1ポンド [110グラムあまり]」と「チョコレートを1オンス [30グラム足らず]」である。殺鼠剤や殺虫剤は量が問題ではなく、効き目が強力であれば微量でもよいことになるので、単純な量の比較はあまり意味がないと言えるが、ネズミはゴキブリより大きいのでお茶の量もかなりなもので、一方、ゴキブリは小さいのでお茶に比べればチョコレートもわずかで済んでいるのかもしれない。あるいは、ネズミ用とゴキブリ用の対比から、お茶の方がチョコレートよりも劇薬であることが示されているのであろうか。いずれにせよ、不純物混和にも思わぬ効用（有用な使い道）があると皮肉っているわけである。

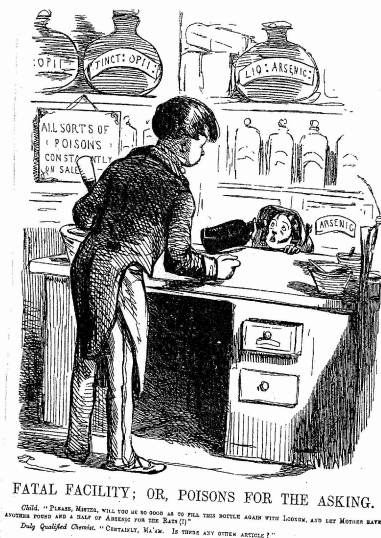


図4。「致命的な便利さ、あるいは欲しいと言えば手に入る毒薬」(『パンチ』第17巻96頁 [1949年9月8日号])

この図版とよく似た構図の図版が、1849年9月8日号の『パンチ』に掲載されている。「致命的な便利さ、あるいは欲しいと言えば手に入る毒薬」(“Fatal Facility; or Poisons for the Asking”)と題された、同じくジョン・リーチの手になる諷刺漫画で、子どもの使いにいと簡単にアヘンチンキやヒ素を売る薬屋の姿が描かれている(図4)。薬屋の店内には、アヘンチンキの大瓶やヒ素の引き出しが並び、「あらゆる種類の毒薬常時販売中」という広告が人目を引くように掛けられている。この図版には、以下のようなキャプションが付いている：

子ども：「アヘンチンキを、また、この瓶一杯にお願いします。それに、お母さんがネズミ(!)用にヒ素をもう1ポンド半お願いしますって。」

正規の薬剤師：「かしこまりました。ほかにご入り用のものは？」

この図版の対面頁に載っている「毒薬店」(“The Poison Shop”)と題された関連記事は、ネズミ用のヒ素が「埋葬クラブ」に入っている父親によってその保険金目当てで我が子を殺すために使用される可能性がある、とほめかしている。¹⁰ 次々に毒を売って顧客をさばいたこの「毒薬店」の店員は、最後に一言、こう述べている：「これでもし葬儀屋が仕事を一つ二つ手に入れなければ、——それにおそらくは絞首刑執行人もまた仕事を一つ二つ手に入れなければ——とんだ驚きだ」(“The Poison Shop” 90)。殺人(homicide)を含む、家庭の様々な目的のために、種々の毒薬がなんの規制もなしにとても容易に薬屋で売られている実態を、『パンチ』は厳しく諷刺していることになるが、同様の諷刺が「不純物混和の効用」において薬屋から食料雑貨店にところを変え

て行われていると見てよいであろう。

両方の図版とも、カウンターを挟んでお使いの女の子と店員(「不純物混和の効用」では店主の可能性もある)が相対しているが、子どもの表情の相違が目をはく。「致命的な便利さ」の女の子は、明らかに余り裕福でない家庭の子どもで、頬もこけ、栄養も十分ではないようである。アヘンチンキの常用がもたらす健康不全が示唆されている。一方、「不純物混和の効用」の女の子の方はふっくらとしていて、発育状態が悪いようには決して見えない。この子の母親がこの店で売られているお茶やチョコレートに不純物混和がなされていることを十分承知し、食用としてではなく、殺鼠剤、殺虫剤として購入していることを考えれば、その母親は不純物混和に対しては十分に注意していて、子どもにそのような毒入りの食品等を食べさせないように気をつけているし、そうするだけの経済的余裕もあると推察できそうである。

もっとも、毒入りであることを知らずに購入する人や不純物混和されている安価な食品を購入せざるを得ない貧しい人たちの場合、人間はネズミやゴキブリよりも何倍も図体が大きいので微量の毒はすぐには身体に害をなさないかもしれないが、そのような食品を食べ続けていればいずれは健康を害してしまうことになる。なかでも体の弱い年寄りや幼い子供がまず最初に犠牲者になり易いといえる。この図版の健康そうな幼い子どもも、もしそのような食品を食べていれば、やがて害され、その丸々とした頬も影を潜めてしまうことになると、当時の読者にも容易に察知されたのではないだろうか。だとするならば、女の子の丸々とした頬は、間接的に、何の有効な規制も図られずに放任されている不純物混和に対する雄弁な警告になっていると見なせるであろう。

カウンターの下にいろいろな混ぜ物の袋や容器が見えていて、不純物混和の蔓延ぶりを示唆するとともに、上述の警告に具体性を付与している。「ボール・アルメニアン」(赤土の一種)はココアやアンチョビ、種々のソースなどの着色に、「鉛丹」はアナットーやカレー粉の着色などに使用され、有毒な「マチン」はビールやエールに苦みを付与するために、「焼き石膏」と「砂」は小麦の量と重量を増すためなどに使用されると、当時、言われていた混ぜ物である(Stieb 215)。¹¹

店員(店主)に注目すると、「致命的な便利さ」では店員の顔の表情はほとんど見分けがつかないが、興味深いことに「不純物混和の効用」では食料雑貨店の店員(店主)の顔の表情がうっすらと読み取れる。子どものことづけを聞いて、店員(店主)は喜んでその品物を出そうとしているというよりは、むしろ店で売っている品物が毒入りであると暗に言われて慥然としている、あるいは怒っているような、どちらかと言えば、陰しい表情を浮かべているように見える。カウンターの下に隠して

ある不純物のことが見透かされてぎくりとし、懺然となっているのであろうか、それとも毒入りのものを売っていると言われて怒っているものであろうか。いずれにせよ、ここでは、目と目を合わせているお使いの子どもと店の大人の対比が見事である。innocent な（無邪気な＝無垢な＝罪のない）子どもと sinful な（罪深い＝邪悪な＝不正を行う）大人の対比が両者の眼差しにはっきりと示されている。つぶらな瞳で真っ直ぐに大人の目を見つめて無邪気に言いつけられた通りにお使いをしている子どもを前にして、その店の大人は自分が行っている不正を見透かされてぎくりとしている、ないしは怒っているわけで、子どもの無垢と大人の罪が鮮やかに対比され、不純物混和を行う大人たちに対する痛烈な批判となっている。¹²

(ii) 「偉大なる菱形ドロップ製造人：家長への一つのヒント」

1858年11月20日号に掲載された諷刺漫画であり、11月11日号の『タイムズ』に掲載された2つの記事——10月30日に起きたブラッドフォード中毒事件の記事と不純物混和の報告記事——に直接答えたものとなっている（図5）。前者は、ブラッドフォードの菓子屋が菓屋の店員から砂糖菓子の製造で自由に混入されている「ダフ」（焼き石膏）を12ポンド受け取る代わりに、間違っ同量のヒ素を受け取り、その結果、誤ってヒ素が混入された菱形ドロップが製造され、それを食べて18人ないし20人が死亡、200人以上の命が重大な危機に瀕したという悲劇的事件のことである（“The Poisonings at Bradford”；*Mr. Punch's Victorian Era* 293；Wilson 181）。すでに40年代末、『パンチ』は「致命的な便利さ」においてヒ素を含む毒薬の販売管理の杜撰さを告発していたが、この悲劇的事件から察するに50年代末でも事態は余り改善されていなかったようである。¹³ 後者はハッサルによる報告記事で、焼き石膏がしばしば数種類の砂糖菓子の中に混入されていたことを再度確認したという内容のものである（Hassall；Altick, *Presence* 566）。

この図版の対面ページに掲載されている関連記事「毒の入っていない砂糖菓子」（“Sweets without Poison”）には、以下のような不純物混和が指摘されている：「現在出回っているロリポップ（棒付きキャンデー）に一般に混入されているダフという材料は、俗に焼き石膏と呼ばれる硫酸カルシウムからできている。」この物質は骨相学の胸像などを作るのには実に適したものであるが、ロリポップの製造に使用されるのには全く不向きなものである。人間の胃はこのような「消化されない物質」で壁塗りされるようには決してできていない。しかも、その物質そのものは真っ白で、市販のヒ素も同様に真っ白である。それゆえ、後者は容易に前者と混同されやすく、



図5．「偉大なる菱形ドロップ製造人：家長への一つのヒント」（『パンチ』第30巻207頁〔1858年11月20日号〕）

その結果、「原因が特定されず、嫌疑のかかる心配のない健康被害のつもりであえて冒された不純物混和が即死を招くことになる」等々。

図版には、「オール・ソーツ」（リコリス入りキャンデーの詰め合わせ）や「モットー」（愛の詩やモットーが一緒に包まれているキャンデー）や「ボン・ボン」などが並べられている菓子店内で、「偉大なる菱形ドロップ製造人」たる骸骨（＝死神）が、乳鉢と乳棒を使って何やらこねている姿が中央に大きく描かれ、その仕事上の骸骨をはさんで両側に、この関連記事で言及されている「焼き石膏」と「ヒ素」の入った容器が大きく描き込まれている。「焼き石膏」の入った箱にはシャベルが、「ヒ素」の入った樽には小さなスコップが、それぞれ半ば差し込まれた状態であり、この骸骨がこねているのは「焼き石膏」と「ヒ素」の混ぜ物らしい。だとすると、この菓子屋が作っている菱形ドロップの材料は、二つの有害物質を混ぜ合わせた有毒なもので、その効き目もすばらしいものがありそうだ。それ故であろう。よく見ると、その骸骨の足もとの床面は教会内の墓石を思わせるような形をしており、しかもその上には天使の姿が描かれている。この菓子屋の菓子を食べた子どもたちは死んで天使になることが示唆されているのである。ヴィクトリア時代、営利目的の民間の託児業者たちは預かった乳幼児たちをアヘン剤の過剰な供与や故意の怠慢によって容赦なく処分したため、ときに「天使製造人」（angel-makers）と呼ばれていた。この菓子職人も同類である。この骸骨の職人は「菱形ドロップ製造人」でもあれば「天使製造人」でもあるのだ。そのことを意識すると、ヒ素の樽の上の方に掛けられている菱形状のもの（菱形ドロップの宣伝用ボードか？）の黒い縁取りは、訃報の黒枠（訃報は黒枠の便せんと黒枠の封筒が使用された）を連想させ、その中に髑髏に似た図案が認められる。ヒ素の混入による死が示唆されているのであろう。

この図版の副題「家長へのヒント」とは、どんなヒントを意味しているのでしょうか。「致命的な便利さ」で言及されていたような、「埋葬クラブ」に入っている貧乏な父親にとっては、ヒ素の代わりに菓子(菱形ドロップ)を使用してもよいというヒントになりうるし、一方、「不純物混和の効用」の母親のような、子ども思いの裕福な父親にとっては、菓子を子どもには控えさせなければならないというヒントになりうるであろう。¹⁴ 家長の経済的裕福さと子どもに対する姿勢次第でヒントの意味が逆転してしまう。その意味ではこの副題は両義的であり、不純物混和問題を英国における「二つの国民」問題というより大きな視点に立って熟考するように読者を促していくようである。

(3) 文学作品と料理書

19世紀後半になると、不純物混和に言及した文学作品が目につくようになるが、いずれもごく簡単な言及にとどまり、『ハンフリー・クリンカー』のようにやや詳細に触れたものは見あたらない。とはいえ、そのような作品の存在は、不純物混和問題への社会的関心の高まりを証明する文学的証言の一つと言えるであろう。ここでは簡単にそれらの例のいくつかに触れておきたい。

まず、『ランセット』のキャンペーンが開始された1850年に、キングズレー (Charles Kingsley, 1819-75) が社会問題を扱った小説『オールトン・ロック』(*Alton Lock*) を発表し、その中で数種の不純物混和(砂の混入した砂糖、果物の葉が入った茶、明礬や骨粉が混ぜられたパン、粗悪な挽肉や水)に言及している。ロンドンの不健康さと商人たちの道徳観、宗教観の堕落が、そうした不純物混和を通して厳しく非難されている (chs. 5, 6)。

より興味深いのは、同著者による童話『水の子』(*The Water-Babies*, 1863) である。「お菓子の国」の場面で、分析衛生委員会のレサビーとハッスルの名を引き合いに出しながら、ヴィクトリア中期の菓子の不純物混和の悪質さとその根絶の困難さ、及び将来の改善への淡い期待が、寓意的に描き出されている：

妖精たちはこの国から悪い食べ物をなくしてしまうと一生けんめい働いていたけれど、ほとんど無駄だった。というのも、妖精たちがかたづけるそばから、愚かでたちの悪いおとなたちが、石灰だの毒のある着色料だのがいっぱい入った新しい菓子を作ったり、“科学”という名のおばさんが書いた時代遅れの厚い本から処方方を盗みだして、子どものからだに悪い食べ物をつくったりしては、お祭りだの、博覧会だの、駄菓子屋の店先だので売るからだ。本当に、やれやれ、だね。でも、まあ、当分はやらせておくよりしかたがないだろう。こんな連中は、ドク

ター・レサビーとドクター・ハッサルが一日じゅう罫をしかけて待っていても、つかまりっこないのだから。でも、そのうちに、カバのむちを手にした大妖精がやってきて連中をつかまえ、店にあるものを片っぱしから食べさせるだろう。そうすれば、連中もひどい腹いたを起こして、それからは子どもたちに悪い食べ物を売ったりしなくなるだろう。(333)

ヴィクトリア時代を代表する詩人テニスンは、桂冠詩人となって間もない1855年に発表した『モード』の中に、以下のように不純物混和の問題を読み込み、「進歩の時代」における「知性」の悪用を諷刺している：

しかし今日は進歩した時代、それは知性を持つ人々が作りあげたもの、

この進歩した時代において、愚か者以外の誰が商人たちの品物や言葉を信ずるであろうか？

……会社はブドウ酒を捏造する。

貧乏人にはパンの代わりにチョーク、明礬、焼き石膏が売られ、

殺人の精神がまさに生活の糧の中に入り込んでいる
(I, 25-26, 36, 39-40)

ほぼ同じ頃、1853年にギヤスケル (Elizabeth Gleghorn Gaskell, 1810-65) は『クランフォード』(*Cranford*, 1853) の中で茶の不純物混和に言及し、ブルワー＝リットン (Edward Bulwer-Lytton, 1803-73) は1857-59年に発表された小説の中で (*What Will He Do with It*)、登場人物に「ロンドンで使われるものはどれも不純で混ぜ物をされている」と言わせている (Caxton 421)。

文豪ディケンズは、雑誌記事等を含め、その著作の中でかなり不純物混和に言及しているが、『我ら共通の友』(*Our Mutual Friend*, 1864-65) では「陰鬱な分析化学者」に準えられた執事を登場させ、ワインの不純物混和に言及している (Bk 1, ch. 2; Long 参照)。

トロロップ (Anthony Trollope, 1815-82) の作品にはペーストリー菓子 (*Barchester Towers* [1857], ch. 36) とピール (*Can You Forgive Her?* [1864-65], ch. 12) の不純物混和への言及が、そしてジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-1880) の作品にはピクルス (“Silly Novels by Lady Novelists” [1856]; *Middlemarch* [1871-72], ch. 15)、ミルク (“Amos Barton” [1857], ch. 1; *Middlemarch*, ch.15)、茶等 (“Brother Jacob” [1864], ch. 2)、ワイン (“The Natural History of German Life” [1856]) の不純物混和への言及が、それぞれ見いだされる。

女流詩人クリスティーナ・ロセッティ（Christina Georgina Rossetti, 1830-94）の『ゴブリン・マーケット』（*Goblin Market*, 1862）ではお菓子の不純物混和（Stern 参照）が、ウイルキー・コリンズ（William Wilkie Collins, 1824-89）の『夫と妻』（*Man and Wife*, 1870）では砂糖の不純物混和（ch. 6）が、ギッシングの『余った女たち』（*The Odd Women*, 1893）ではチーズの不純物混和（ch. 10）が、それぞれ言及されている。

以上の例だけでも、19世紀後半の文学作品中に不純物混和への言及がかなり見いだされることが分かるが、1850年代の作品により多く見いだせるのは『ランセット』のキャンペーンによる社会的関心の高まりの反映と見てよいであろう。

家庭用の料理書にも、不純物混和が取りあげられている。早い例では、ミセス・ランデルの『家庭料理の新システム』（Maria Eliza Ketelby Rundell, *A New System of Domestic Cookery*, 1806）が注目に値する。この本は1806年に出版されて人気を博し、以後、改訂を重ねながら版を重ね、最終版が1893年に出ている。19世紀に人気を博した料理書の一つである。この料理書の中に、「パンが胡粉やチョークで不純物混和されているかどうかを見つけるために」及び「パンに入っている骨、ヤラッパ、灰、等々を見つけるために」と題されたセクションがあり、家庭で簡単にできるパンの不純物混和の検出法が紹介されている。前者はパンにレモン果汁か酢を混ぜて、発酵状態になれば、アルカリ性のものが混じっていると思ってよいであろうというものであり、後者はパンくずを水と一緒に火の上に置き、ゆっくりと長い時間をかけて沸騰させた後、その沈殿物を観察するというものである（A Lady 245）。

1861年に出版されたビートン夫人の『家政読本』（Isabella Beeton, *The Book of Household Management*）は、家政全般を扱った本であるが、料理のレシピが大半を占め、『ビートン夫人の料理書』という名前でも知られている。初版は一年で6万部以上売れ、1868年までに2百万部近くを売り上げ、その後も版を重ねて大成功を収めた、最も有名なイギリスの料理書である（Humble vii）。この本には、ボール・アルメニアンを使ったアンチョビーペーストの着色、醤油の不純物混和、プラムを使ったワインの不純物混和、水で薄められ、ときに少量の澱粉で濃くされたり卵黄やサフロンで色づけされたりしているミルク、ジャガイモや骨粉、明礬が混入された白いパン、リンボクやセヨウサンザシ、トネリコ、ニレ等の葉が混ぜられている茶、のことが記載され、有害な不純物混和に対する注意が喚起されている（Beeton 116, 239, 794, 812, 831, 873）。この本の売れ行きから判断すると、19世紀後期の家庭の主婦に対して不純物混和に対する関心を喚起するのに多大なる貢献をした実用書であっ

たといえよう。

(4) 法律の制定と取り締まりの強化

『ランセット』の分析衛生委員会報告は、医師たちの覚醒を促し、サンプルを試験して改革運動を始める人たちを輩出した。中でもバーミンガムの外科医でシデナム・カレッジの講師であったポストゲイト（John Postgate, 1820-81）は熱心な改革運動者の一人であった。その彼が、1854年1月にバーミンガムの急進的議員スコルフィールド（William Scholefield, 1806-1867）に宛てた手紙の中で調査委員会の設置を提案したことがきっかけで、翌年には下院に不純物混和を調べる特別調査委員会が設置される運びとなった。スコルフィールドが委員長を務め、多くの証人に質問がなされ、同委員会は1856年に「不純物混和が広く行われていると結論づけざるを得ない」という報告を提出したのである（Rowlinson 66；Burnett 223-24）。

いまや不純物混和を取り締まる法律が制定されるべきであることが確かになったが、その制定はすんなりとはいかなかった。スコルフィールドが議会に提出した法案は食料雑貨商とコーヒー商の強い反対に遭い、しかも多くの議員が商業に関係していた下院はその法案を審議する時間をとらなかったのである。法律制定は行き詰まりの様相を呈することになったが、1858年10月末に起こったブラッドフォード中毒事件の悲劇が事態に変化をもたらし、法律制定への道が開かれた。スコルフィールドは1859年早々、最初の法案よりも緩い法案を提出し、それがようやく可決されたのである（Wilson 138）。

(i) 「不純食品取締法」(the Adulteration of Foods Act, 1860)

このようにして1860年に制定された「不純食品取締法」は、「飲食物を販売する者は誰であれ、飲食して人体に有害な成分あるいは材料が混入されていることを知ったうえでこれを販売するか、また、混合物があつて純正ではない飲食物を純正で混合物がないとして販売したならば、これらの違反一件につき即決裁判で、5ポンド以下の罰金及び手数料を支払うべし」と定め、二度目にこうした違反を犯したならば、違反の事実と販売人の住所氏名が本人の費用負担で新聞に掲載されることを定めていた。

しかし、この法令は地方当局が公認分析官を任意に指名することを許し、サンプルを押収し違反者を起訴する義務を持つ役人をおかなかったため、実質的には死文に等しかった。業界の反対がその法律が広い地域に渡って採用されるのを阻んだのである。その法律が存在した12年間に約20名の分析官が任命され、そのうち精力的に活動したのは2名だけであった（Rowlinson 66）。

公認分析官の任命に対する業界の反対は、ヴィクトリア中期の商業界全体の倫理の衰退を示唆するものであろう。1872年の法律に基づいて任命された公認分析官のスコット (Wentworth Lascelles Scott) は、当時の商業界を批判して、昔の同業者組合すなわちギルドは自分たちが商う商品の純正さを維持するのをその任務として、不純物混和を含め、あらゆる種類の不法行為を止めさせることを公言し、そのための規定を設け、そのような犯罪を犯したメンバーに対してはその商売を続ける手段を剥奪することをしばしば行っていた、しかるに一方、現代の新たに組織された同業者団体は、少数の例外を除いて、そのような不法行為に対して実質的な反対を表明しないばかりか、その組織力等を使ってそうした不法行為に対する起訴を阻止しようとし、もしその阻止がうまくいけば、大喜びするだけである、と告発している (Scott 429)。

かつて中世の市場 (market) には、市場十字 (market cross) が建てられ、商人たちに「信仰」に基づく正直な取引の大切さを喚起していた (Harrison 12)。宗教的懐疑の時代となり、もはや往古のギルド的自主規制も無くなった、自由放任の功利的個人主義のヴィクトリア時代、商業倫理の衰退は個人のレベルから業界全体のレベルにまで波及し、社会を蝕んでいたのである。

(ii) 「不純食品取締法」(1872)

1860年の法律は実効を伴わないものであったが、当時としては、売り手と買い手の間に法律を設けようとする試みだけでも、自由放任主義体制に対する意義深い挑戦だったといえる。そしてこの法律の制定により、「消費者のポケットと健康の害に対して、消費者を保護することは、国の重要な役割の一つである」という重要な先例が確立されたのであった (Burnett 229; Scott 427)。

より効果的な法律の制定を求める運動が展開されたが、『ランセット』はその先頭に立ち続けた。また、1864年には「英国薬剤協議会」(the British Pharmaceutical Conference) が1860年法では対象となっていなかった薬品 (drugs; 薬物だけでなく、化学・染料等で使用する原料・成分も意味した用語) の純正度の調査に着手し、さらに1871年2月には「反不純物混和協会」(the Anti-Adulteration Association) という圧力団体が創設されて、その運動の推進に貢献していった (Rowlinson 66, 67)。¹⁵ かくして、ようやく1872年に旧法を大幅に改めた「不純食品取締法」が制定されたのである。この新法による重要な規定や改善点として、以下のようなものが挙げられる：

- (1) 有害な不純品の販売に対し50ポンドを超えない罰金、再犯は6ヶ月の懲役が科されることになった。

- (2) 重量を加算する目的の成分を含んでいる混合物を販売することは、もしその成分が購買者に宣告されていなければ違法 (an offence) とされた。
 - (3) 不純物を混入された薬品の販売も違法とされた。
 - (4) 公認分析官を任命する権力を、州から市 (それぞれの警察制度を持っている borough) にまで拡大した。その任命は地方行政局 (the Local Government Board) の命令がある場合を除けば、まだ任意であったが、地方行政局の命令というのは重要な改善であった。なぜなら、中央の統制 (central control) の要素を導入したことになるからである。
 - (5) 生活妨害監督官、市場監督官、度量衡監督官が分析官のためにサンプルを集め、不純物混和をしている商売人を起訴することが規定された。
- (“Adulteration”; Burnett 229-30; Rowlinson 68)

これらの改善点にくわえ、その施行も旧法よりも広範で精力的なものであった。3年以内のうちに、分析官を任命する権力を与えられた225地域のうち、150地域が分析官を任命し、1,500件以上の不純物混和の有罪判決が得られたのである。先述の公認分析官スコットによれば、北スタフォード州で15ヶ月の間に、937個の無差別の、食物、飲み物、薬品のサンプルを入手し分析したところ、そのうち381個が不純物混和されたものであった。最大の問題はミルクで、そのサンプルの半分以上がきわめて不純な水で薄められていた。ビールの89個のサンプルのうち、26個が不純物混和されており、そのうちおよそ6個に有害なココルス・インディクス (ツヅラフジの実) が混入していた。マスタードのサンプルの半分以上は不純で、小麦粉とウコンを含み、コショウのサンプルの1/3以上は砂と様々な野菜類を含んでいた。一方、すでに大いに改善された食物もあった。パンは22個のサンプルのうち3個だけが不純であり、22個の砂糖菓子のうち2個だけが不純で、クロム酸鉛を含んでいたのは1個だけだったのである (Scott 430-31, 433; Burnett 229-30)。

ただし、分析官の採用が地域によって大変不均一で、また、多くの分析官は経験不足で未熟でもあった。特に問題であったのは、不純物混和をなすものについての明確な基準がなく、その点に関しては専門家の間でさえ見解の相違があったことである。これらの欠点に関する商人たちの苦情を受けて、1874年に特別調査委員会が設置されたが、その委員会は、1872年法のおかげで、人びとは「今や、毒されているというよりも、むしろだまされて」(now cheated rather than poisoned) いるという状態であることを認めるとともに、不純物混和を構成するものとそうでないものに関する、より明確な理解を与えるために、その法律は修正される必要がある、と報告した。(Burnett 230)。

この報告に基づいて、1875年「食品・薬品販売法」(the Sale of Food and Drugs Act) が制定された。同法は、その後修正や追加条項を伴って、¹⁶ 今日の法律の基礎となっているものである。

(iii) 「食品・薬品販売法」(1875)

この法令は不純物混和という用語を一切使用せず、処罰の対象となる違反について、より明確な記述をするに力を注いでいる。

例えば、その第6条は、以下のように、付帯条件付きで規定されている：

購買者がもつめた品物の、性質、内容、品質とは異なる食品や薬品を販売して、購買者に不利益を与えた者には、20ポンド以下の罰金を科す。ただし、以下のケースにおいては、この条に該当しないとみなされる：

- (1) 人体に有害でない物質あるいは混合物を、食品または薬品の製造または調整の過程で、その商品を運送したり消費したりするのに便宜をはかるために加えたのであって、嵩や重量や寸法をごまかして増加させたり、劣った品質を隠蔽するためではない場合。
- (2) 薬品あるいは食品が、特許売薬あるいは有効な特許の対象となり、特許の仕様書に書かれてある状態で供給されている場合。
- (3) 本法令で定めてあるやり方で食品あるいは薬品が調合されている場合。
- (4) 食品あるいは薬品に、集めたり調整したりする段階で、外部のものが避けたい事情から混入してしまった場合。(Bartley 48-49)

不純物混和に該当しない場合を規定した条項もある。例えば、8条によれば、「人体に有害でない物質あるいは混合物を、嵩や重量や寸法をごまかして増加させたり、劣った品質を隠蔽することを目的とせず食品あるいは薬品に混入し、そのような食品や薬品を買い手に譲渡する際に混合していることを明記したラベルをつけて通知している場合」は、売り手はこの法令に違反しているとして有罪に問われない (Bartley 63)。

また、旧法では故意に不純物混和をしたのではないと証明できた店主は法的責任を免除されたが、この新法では故意であろうとなかろうと、有罪とされた。従来の「買い主をして注意せしめよ」の原則が「売り主をして注意せしめよ」の原則に道を譲ったことになる (“Adulteration” ; Burnett 228 ; Bartley 49)。¹⁷ さらに、1875年法は、地方当局に公認分析官の任命を義務づけただけでなく（第10条）、その分析官に統計的報告を地方

行政局に四半期ごとに報告することを義務づけてもいる（第19条）。これらの条項は、旧法の不備を補う最も重要な改善点であるといえよう。なお、食品サンプルの収集は義務づけられなかったが、この点に関しては、1899年の「食品・薬品販売法」においてその修正がなされ、義務化がはかられることになる (Bartley 139-40 ; Rowlinson 70)。

この新しい法律が制定されてから10年余りの間に、不純物混和の大幅な改善が達成された。義務づけられた公認分析官の報告から、不純物混和の徐々の克服と抑圧の経過が見て取れる。報告書が初めて出された1877年、国中で分析された無差別サンプルの19.2%が不純なものであったが、その割合は1885年には13.2%に下がり、1895年には10%を切って9.3%にまで下がり、1900年には8.8%になっている（表1 ; Burnett 232）。多くの基本的な食品の品質に目を見張るような改善が起こり、その結果、ヴィクトリア時代の終わりまでに、消費者はパンも小麦粉も茶も砂糖も概ね純正なものを受け取った。

地方当局によって監視がなされ、警告が繰り返されたにも拘わらず、酒類等是不純物混和があとをたたなかった。1900年には全ビールの13%、火酒は12.4%、コーヒーは10%、ミルクは9.9%が依然として不純物混和されていた。しかし、これらの場合の大部分における主要な違反は単に水で薄めただけというものであり、故意の、危険な不純物混和はほとんど消滅してしまった (Barnett 232)。

基本食物の改善のうち、パンや茶の改善が最も著しいものであった。パンは1877年には7.4%が不純物混和されていたが、1898年以降は1%以下に減少し、0%のときも見いだされるようになった（表1）。茶は1872年の調査では41個のサンプルうち36個が偽の茶や陶土等でひどい不純物混和がなされていたが、1886年以後は1年に1件の報告さえ見つけるのがまれとなった。1875年法の下で茶は二度検査を受けた。一度は英国に到着したとき税関局によってなされ、さらに国内での不純物混和が疑われるときには公認分析官による検査がなされたのである。これに加え、中国の緑茶の人气が下がり、19世紀後半から本格的に輸入され出したインド茶とセイロン茶が優勢となった。これらの茶の純正さは決して疑わしくなかったのである。こうした要因が最も深刻な不純物混和の一つであったものに終止符を打ったのである (Burnett 234)。

1875年法が修正・追加条項を伴って、かなり有効に施行されていった背景には、地方行政局の指導力があつた。地方行政局は当局に分析官を任命するように説得したりなだめたりしたが、その回状の調子は次第に権威的となっていき、数年以内に、ほとんど全ての当局が同調して、定期的なサンプリングを開始したのである。毎年分析さ

表1. 「1877年から1914年までの不純物混和されたパン等の統計(公認分析官の四半期ごとの報告の集計)」(Burnett 233)

Year	Number of samples of bread analysed	Adulterated	Percentage adulterated	Percentage of all articles adulterated
1877	998	74	7.4	19.2
1878	921	66	7.1	17.2
1879	1,287	95	7.3	14.8
1880	1,096	70	6.4	15.7
1881	1,037	49	4.7	14.7
1882	1,204	77	6.4	15.1
1883	1,041	25	2.7	15.0
1884	1,217	24	2.0	14.4
1885	1,168	31	2.7	13.2
1886	991	32	3.2	11.9
1887	872	17	1.9	12.8
1888	689	4	0.6	10.8
1889	952	21	2.2	11.9
1890	689	5	0.7	11.2
1891	799	8	1.0	12.2
1892	804	3	0.4	12.4
1893	698	1	0.1	12.9
1894	653	9	1.4	10.3
1895	575	10	1.7	9.3
1896	625	1	0.2	9.2
1897	630	9	1.4	9.4
1898	717	6	0.8	8.7
1899	597	3	0.5	9.4
1900	437	3	0.7	8.8
1901	530	4	0.8	8.8
1902	552	2	0.4	8.7
1903	561	0	0	7.9
1904	473	1	0.2	8.5
1905	463	1	0.2	8.2
1906	373	1	0.3	9.3
1907	528	4	0.8	8.1
1908	394	4	1.0	8.5
1909	352	2	0.6	7.5
1910	327	0	0	8.2
1911	618	1	0.2	8.7
1912	414	0	0	8.4
1913	405	4	1.0	8.2
1914	No statistics available.			

れるサンプルの数は着実に増えていった。1877年には14,706個であったのが、1883年には19,678個が分析され、1889年までに人口1,000人に対して1サンプルの目標を地方当局は達成した。その年の分析数は26,594個である。その後、1904-1905年には84,678個にまで達し、1サンプルに対する人口率は384人となった(Burnett 231; “Adulteration”)。

公認分析官の技量と能力も向上した。1875年法が制定される前年の1874年に「公認分析官協会」(the Society of Public Analysts)が創設された。数年以内に、国内のほとんど全ての分析官を含む団体となり、会報も出版して、食物の純正さのための新しいテスト方法と基準の発展に貢献していったのである(Stieb 204-08; Burnett 232)。¹⁸

法的規制の強化、地方当局の働き、公認分析官の技量と能力の向上、これらのものが効を奏して、19世紀半ば、『ランセット』のキャンペーンを皮切りに大きな社会問題となっていた不純物混和の蔓延は、ヴィクトリア時代の終わりまでに大幅な改善が図られ、その社会問題も沈静化していったのである。

なお、1860年代に始まる不純物混和に関する、これらの一連の立法は、国民全体の健康を守るため、当時の支配的理念であった自由放任の原理に抗して制定された法律として、公衆衛生の確立さらには20世紀の福祉国家の形成に寄与する、初期の重要な社会福祉政策の一つに位置づけられ得るものであり、社会史的にみても意義深いものであったと言えよう。

注

*本稿における引用文の訳は、邦訳があるものは参考にしたが、適宜変更を加えた。

- 1 リート裁判所とは、州奉行巡回裁判 (Sheriff's tourn) の裁判権を特権により私人が行使する裁判所で、荘園領主や都市により極めて多くもたれていた。領主の執事が主宰し、十人組検査 (view of frankpledge)、住民から選ばれた陪審による管轄内の全犯罪の告発、及び軽罪の処罰等を行った。16世紀以降、治安判事の興隆に伴い衰退したが、19世紀にもその存在は認められた。1922年の財産権法により、膳本保有権が廃止されたため、荘園に基礎をおくこの裁判所も事実上消滅した(「court leet」; 「Court-leet」)。
- 2 オランダの眼鏡師ヤンセン父子によって1590年から1609年ころにかけて発明されたとされる顕微鏡は、ガリレイらの改良を経て、主としてイタリアとオランダで作られ、17世紀中頃にはかなり普及していたという。しかし、当時の顕微鏡はまだ極めて不完全なものであり、特にレンズ系には収差の大きいものが用いられていたため、有効な利用には限界があった。ようやく1791年に色収差なしの複合レンズが初めて作られ、それが1830年代に入ってからさらに改良されて、1840年代には顕微鏡が商品として市場に現れるようになった(「顕微鏡」)。19世紀の第2四半期に達成された顕微鏡の改良と普及がなければ、その第3四半期における顕微鏡使用者としてのハッセルの活躍は覚束なかったであろう。
- 3 フィルビーによれば、ハッセルはミラー以外の画家にも手助けしてもらい、数名の熱心な顕微鏡使用者たちにも手伝ってもらったらしい(Filby 194)。
- 4 検査した品目とサンプルの正確な数は目下のところははっきりしない。今後調査して確認する必要がある。ここではローリンソンの指摘に従った。なお、チャーニーは44品目、グレイは2500以上のサンプルと指摘している(Charnley 129; Gray 103)。
- 5 分析衛生委員会の報告が発表されると、すぐに『タイムズ』や『パンチ』をはじめ、『マンチェスター・ガーディアン』、『コマーシャル・デیلیー・リスト』、『イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ』、『レディーズ・ニューズペーパー』が、『ランセット』に支持を表明した(Dopson 581)。『ランセット』のキャンペーンに関して、『薬剤学雑誌』の編者は1855年に「報道界全体がその叫びに加わり、大衆は驚愕させられた」と述べている。ただし、一般の定期刊行物のうち『ジェントルマンズ・マガジン』や『コーンヒル・マガジン』などは積極的ではなかったと指摘されている(“Adulteration and the *Lancet*” 244; Steib 212-16)。
- 6 このコーヒーの報告が掲載された『ランセット』がブリストル市に届けられるやいなや、ほとんどすぐに、当市でもっともはやっている店の一つから缶に入ったコーヒーが突然ショーウィンドウから姿を消し、代わっ

- て炒った、挽かれていないコーヒーの入った袋が並べられた、と『ファミリー・ヘラルド』（1851年4月15日号）は伝えている（Dopson 581）。
- 7 例えば、1842年1月1日号の“The London Brewery”、同年2月5日号の“Trade Report”、1848年9月23日号の“Sanitarianism and Insanitarianism”、1849年11月17日号の“Milk for the Million”等がある。
- 8 グレイズ・オブ・パラダイスは西アフリカ産ショウガ科の植物の種子で、ギニー・グレイズ（Guinea grains）とも呼ばれる。強い苦みがあり、ビールに刺激的な風味をつけるのに使用された（Accum 184）。
- 9 牛乳屋（牛乳配達人）に関しては、「パン屋」への説教が載った同じ号に“Milk and Water Punch”と題した記事で、チョークを使った牛乳の不純物混和のことが言及されている（“Milk and Water Punch”）。
- 10 テニスン（Alfred Tennyson, 1809-92）の『モード』（*Maud*, 1855）の中でも埋葬クラブとヒ素を使った子殺しのことが言及されている（I, 45-47；II, 300-03）。
- 11 なお、食料雑貨商は砂糖に砂を混ぜるとよく言われていたが、ハッサルが砂は混ぜられていないことを証明した。しかし、その神話はその後も生き続け、『パンチ』（1855年9月15日号）の“The Adulterator’s Alphabet”にもその神話が登場している。
- 12 子どもの言い間違いにも、別種の諷刺が読み取れるようである。その女の子は、“black beetles”（ゴキブリ）というべきところを“BLACK BEADLES”とっている（松村 114）。その言い間違いに子どもの幼さが表されていると解せるが、それだけではなさそうである。“beadle”（教区吏員）というのは教区の小役人で教会によって選出された（「beadle」）。ディケンズ（Charles Dickens, 1812-70）の『オリヴァー・トゥイスト』（*Oliver Twist*, 1837-39）に出てくるバンブル（Bumble）という beadle は弱いものには威張り散らし、強いものにはへつらう、鼻持ちならない人物の典型である。このバンブルから bumbledom という英語が生まれ、「小役人の尊大さ、けちな権威主義」を意味するようになった。このようにヴィクトリア時代、beadle は尊大な小役人としてとくく世間の人々からは嫌われていた存在だったのである（松村 114；“bumbledom”）。そのような beadle をゴキブリにたとえ、その教区の嫌われ者をできれば「退治したい」という諷刺がこの言い間違いには込められているようである。
- 13 1851年にヒ素販売規制法、1868年には薬事法が制定されて、毒物の販売が規制されていくが、その規制は不十分で、身元や使用目的がはっきりしていれば簡単に入手できるものであった（“Sale of Arsenic Regulation Act 1851”；谷田 12）。
- 14 興味深いことに、この後者のヒントは、セントラル・ミドルセックスの検死官をしていた医師のランキスターによって実際に唱えられることになる。『パンチ』も十二夜の祝い菓子を例に糾弾していたように、有害な鉱物性着色剤による中毒は、当時、決して珍しいものではなく、ときには死者さえでる有様であった。ランキスターは1860年3月に行った講演の中で、公式晩餐会で出された緑色のブラマンジェを食べて5、6人が中毒にかかり、2、3人が死亡した事件や数人の子どもが大層黄色いバスパンを食べて中毒にかかり、死にかけた少年が2、3人いた、というクリフトンでの事件などを報告し、用心のため、着色された砂糖菓子（sweets）を食べないようにと忠告したのである（Jones 12-13；Burnett 227）。
- 15 同協会は、協会名を多少変更しながら、少なくとも1898年まで存続した。その機関誌『反不純物混和評論』（*Anti-Adulteration Review*）も、誌名を変更しながら1898年まで存続したらしい。なお、同協会が姿を消していくことになる1898年頃に、同様の目的をもった別の雑誌『英国食品ジャーナル』（*British Food Journal*）が登場している（Stieb 209-11, 320n13, 320n14）。
- 16 その後の修正法として“the Sale of Food and Drugs Act”（別名、“the Sale of Food and Drugs Act Amendment Act,” 1879）及び“the Sale of Food and Drugs Act,” 1899）がある。なお、マーガリンやバターに関しては、“the Margarine Act”（1887）と“the Butter and Margarine Act”（1907）が制定されている（Bartley 112-83）。
- 17 ウィルソンやローリンソンによれば、すでに1872年の「不純食品取締法」において、「買い主をして注意せしめよ」の原則が「売り主をして注意せしめよ」の原則に道を譲ったと指摘されている（Wilson 136, 145；Rowlinson 68）。この点に関しては、さらに調査・研究して確認する必要がある。
- 18 同協会の会報は *The Analyst*, *Analytical Abstracts* である。同協会が取り組んだ食物の純正さの基準は、最終的に法制上の基準として採用され、1879年には火酒（spirits）、1887年にはマーガリン、1901年にはミルク、1902年にはバター、の法定基準がそれぞれ定められた（Burnett 232）。

引用文献

- “Adulteration.” *The Encyclopaedia Britannica*. 11th ed.
- “Adulteration and the *Lancet*.” *The Pharmaceutical Journal* 15.5 (1855): 244.
- A Lady (Maria Eliza Rundell). *A New System of Domestic Cookery*. New ed. Corrected. London: Murray, 1808. 11 Oct. 2011 <<http://vintagecookbooks.healthyeatingandlifestyle.org/books/1808newsystem.html>>.
- Accum, Frederick. *A Treatise on Adulterations of Food, and Culinary Poisons*. London: Longman, 1820.
- Altick, Richard. *Victorian People and Ideas: A Companion to the Modern Reader of Victorian Literature*. New York: Norton, 1973.

- . *The Presence of the Present: Topics of the Day in the Victorian Novel*. Columbus: Ohio UP, 1991.
- . *The Shows of London*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1978. [『ロンドンの見世物 III』. 小池滋監訳. 国書刊行会、1990.]
- Bartley, D. C. *Adulteration of Foods*. 3rd ed. London: Stevens, 1907.
- Beeton, Mrs. Isabella. *The Book of Household Management*. 1861. N.p.: Nelson, 1977.
- 「beedle」. 『英米法辞典』. 東京大学出版会、1991.
- “bumbledom.” *OED*.
- Burnett, John. *Plenty and Want: A Social History of Food in England from 1815 to the Present Day*. 3rd ed. London: Routledge, 1989.
- Caxton, Pisistratus (Lord Lytton). *What Will He Do with It*. Vol. 1. 1857-59. Boston: Bates and Lauriat, 1891.
- Charnley, Berris. “Arguing over Adulteration: The Success of the Analytical Sanitary Commission.” *Endeavour* 32.4 (2008): 129-33.
- “Coffee and Its Adulterations.” *Lancet* 57.1427 (1851): 21-26.
- Dopson, Laurence. “The Lancet’s Analytical Sanitary Commission of 1851 and Its Effects.” *Lancet* 257.6654 (1951): 580-82.
- 「court leet」. 『英米法辞典』. 東京大学出版会、1991.
- 「Court-leet」. 『英米法辞典』. 有斐閣、1952.
- Engels, Frederick. *The Condition of the Working Class in England*. London: Granada, 1969. [『イギリスにおける労働者階級の状態 (1)』. 全集刊行委員会訳. 大月書店、1971.]
- Filby, Frederick A. *A History of Food Adulteration and Analysis*. London: George Allen and Unwin, 1934.
- Gray, Ernest A. *By Candlelight: The Life of Dr Arthur Hill Hassall*. London: Hale, 1983.
- Harrison, Molly. *People and Shopping: A Social Background*. London: Benn, 1975. [『買い物の社会史』. 工藤成司訳. 法政大学出版局、1990.]
- Hassall, Arthur H. M. “Adulterations” *Times* 11 Nov. 1858: 7.
- Humble, Nicola. Introduction. *Mrs Beeton’s Book of Household Management*. By Mrs Beeton. Oxford: Oxford UP, 2000. Vii-xxx.
- Jones, E. Gabriel. *Food Fakes: Ancient and Modern*. London: Institute of Chemistry of Great Britain and Ireland, 1930.
- Kingsley, Charles. *The Water Babies: A Fairy Tale for a Land Baby*. London: Macmillan, 1888. [『水の子どもたち(下)』. 芹生 一訳. 偕成社、1996.]
- Long, William F. “Dickens and the Adulteration of Food.” *Dickensian* Part 3, 84.4 (1988): 160-70.
- Marx, Karl. *Capital: A Critique of Political Economy*. Ed. Frederic Engels. Revised and Amplified by Ernet Untermann. New York: Random, 1906. [『資本論』. 向坂逸郎訳. 第一巻. 岩波書店、1967.]
- “Milk and Its Adulterations.” *Lancet* 58.1464 (1851): 322-25.
- Mr. Punch’s Victorian Era*. 復刻版. Vol. 3. 本の友社、1995.
- “Punch’s Sermons to Tradesmen: A Gossip by Way of Preface.” *Punch* 20 (1851): 3.
- Rowlinson, P. J. “Food Adulteration: Its Control in 19th Century Britain.” *Interdisciplinary Science Review* 7.1 (1982): 63-72.
- “Royal Polytechnic Institution.” *Illustrated London News* 20.566 (1852): 503.
- “Sale of Arsenic Regulation Act 1851.” 11 Oct. 2011 <<http://www.legislation.gov.uk/ukpga/1851/13/enacted>> .
- Scott, Wentworth Lascelles. “Food Adulteration and the Legislative Enactments Relating Thereto.” *Journal of the Society of Arts* 23 (1875): 427-37.
- Stern, Rebecca F. ““Adulterations Detected”: Food and Fraud in Christina Rossetti’s ‘Goblin Market’.” *Nineteenth Century Literature* 57.4 (2003): 477-511.
- Stieb, Ernst W. *Drug Adulteration: Detection and Control in Nineteenth-Century Britain*. Madison: U of Wisconsin, 1996.
- “Sweets without Poison.” *Punch* 35 (1855): 206.
- Tennyson. “Maud.” *The Poems of Tennyson*. Ed. Christopher Ricks. Vol. 2. London: Longman, 1979.
- [「モード」. 酒井善孝訳. 『世界名詩集大成 9: イギリス篇 I』. 平凡社、1959.]
- “The Fatal Facility ; or Poisons for the Asking.” *Punch* 17 (1855): 96.
- “The Great Lozenge-Maker.” *Punch* 35 (1855): 207.
- “The Lancet Detective Force.” *Punch* 20 (1851): 65.
- The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. CD-ROM Version 3.0. 2002.
- “The Poison Shop.” *Punch* 17 (1855): 96.
- “The Poisonings at Bradford.” *Times* 11 Nov. 1858: 7.
- “The Use of Adulteration.” *Punch* 29 (1855): 47.
- Wilson, Bee. *Swindled: From Poison Sweets to Counterfeit Coffee—The Dark History of the Food Cheats*. 2008. London: Murray, 2009. [『食品の偽装の歴史』. 高儀進訳. 白水社、2009.]
- 「顕微鏡」. 『世界大百科事典』. 平凡社、1984.
- 谷田博幸. 『図説 ヴィクトリア朝百科事典』. 河出書房新社、2001.
- 松村昌家. 『「パンチ」素描集』. 岩波書店、1994.

*本稿は平成20-22年度科学研究費補助金〔挑戦的萌芽研究〕による研究成果の一部である。